

不都合な歴史

ドイツ捕虜余話 2

講師 星 昌 幸

本日は、「千葉フォーラム歴史・文化の会」にお招きいただきまして、ありがとうございます。

習志野俘虜収容所のドイツ捕虜の話を、という須古さんからのご要望ですが、この会の記録を拝見しますと、すでに何回か、ドイツ捕虜のことは皆さんお聞きになっいらっしゃるようにございます。そこで、収容所についてまったく御存知でないという方には、後ほど習志野市のホームページでもご覧いただくことにしまして、今日は「不都合な歴史」と題しまして、普段お話していないことをいくつか、ご紹介することにしたと思います。また特に、今年はNHK『西郷どん』で盛り上がっているところですから、西郷寅太郎のエピソードもご紹介できたらなあと思っております。

エピソード1

私が平成9年にこの調査を始めた頃は、記録を見るのに、飯倉の外交史料館とか中目黒の防衛省防衛研究所までわざわざ出かけて行かないと、調べることができませんでした。

しかも1回に書庫から出してもらえるファイルは何冊までとか、複写は申し込んでから届くまで数週間かかるという具合でしたが、ところがそれから20年経ちましたら便利なもので、外交史料館も防衛研も、インターネットでいながらにして当時の資料を見ることができるようになりました。調べ方をプリントしておきましたので、ぜひ皆様も、お試しになっていただければと思います。パラパラと見てみると、面白いエピソードに行き当たるものです。

その中の一つ、西郷所長の人柄がよくわかるものとして、「俘虜収容所出入職工衛兵司令ト衝突ノ件」という史料（欧受大日記 T5-6-23）があります。大正5年6月、小池憲兵司令官から大島陸軍大臣宛の報告です。こんなことが書いてあります。

東京市芝区にあった某工事業者の主任Yは、習志野俘虜収容所の炊事場用ポンプ修繕に呼ばれ、6月16日から同月21日まで収容所に出入りすることになった。ところが6月18日午前7時30分、衛兵詰所前をうろついていたため歩哨から尋問されたが、「ナニ」と答え歩哨前を通過、ずかずか門の中に入った。そこで衛兵司令だった歩兵第57連隊（佐倉）安藤五郎少尉がYを呼止めたのにこれを無視。兵舎の方に入っていく

ため、「貴様ハ何故待タサルヤ」と云ってYの胸部に手を当てて門外に押出そうとしたが、Yは「貴様トハ何ダ、オマイハ何カ」と安藤少尉に突っかかり、互いに口論の末、Yは事務室に来て「修繕してやらない。東京に帰る」と言って帰ってしまったー、というんですね。

しかも東京に戻ったYは、西郷所長宛に少尉を処分しろと、すこぶる不遜な手紙を寄こしたというんです。習志野衛戍司令官永沼秀文少将はYに遠慮し、形ばかり少尉を咎めて穏便に済ませられないかと考えます。ところが、西郷所長は、Yの言動こそ非常識であり精神に異常があるのではないかと。そうでなければ陸軍刑法95条にも触れる行為だと反発して、安藤少尉を擁護します。この騒動を受けて、小池憲兵司令官としては、安藤少尉の行為は別に咎めなければならないものとは思われない、と陸軍大臣宛に報告している、という文書なんですね。



習志野収容所長西郷寅太郎

民間人である職人が陸軍に喧嘩を売った、という事件なのですが、これがこの後、昭和のウルトラ軍国主義の時代であれば、到底ただでは済まない話だったでしょう。ところがこの時は、衛戍司令官が民間人に遠慮し、丸く収めようとした、というところが注目ですね。そして、その理不尽に対して西郷所長は職を賭して部下を守った、というのです。

後のことになりますが、昭和8年（1933）6月にはいわゆる「ゴー・ストップ事件」という騒動が起こります。大阪・天神橋筋六丁目の、いわゆる天六交差点で、休日

に映画を見に外出した大阪師団の一等兵が、赤信号を無視したあげく、注意した巡査と殴り合いになってしまいます。ところがこれが警察と師団、ひいては内務省と陸軍省の大喧嘩に発展してしましまして、最後は陸軍のゴリ押しが通ってしまうのですが、これが軍国主義時代の到来を象徴する事件だと言われています。ところがその17年前、習志野の騒動の際には、衛戍司令官が道理を曲げてでも民間の機嫌を取ろうとした、というのですから、ここに世相の違いというものが見て取れますね。明治・大正の頃、軍国主義といってもそんなものだった。そしてこの後、軍縮の時代、軍人の立場はますます弱くなります。ところが世界は、逆に「世界最終戦争」みたいな話が叫ばれるようになってくる。その中で軍人の危機感だけがやたらに膨れ上がっていった、昭和を迎えるという構図の一端が、ここにも現れているように思います。狂信的な軍人が増えてくるのは、やはり昭和になってからの現象だと言っていると思います。

それにしても、上司におもねることなく、道理を通して部下を守った西郷所長の姿には、思わず父・隆盛を感じてしまうエピソードなのではないでしょうか。

エピソード2

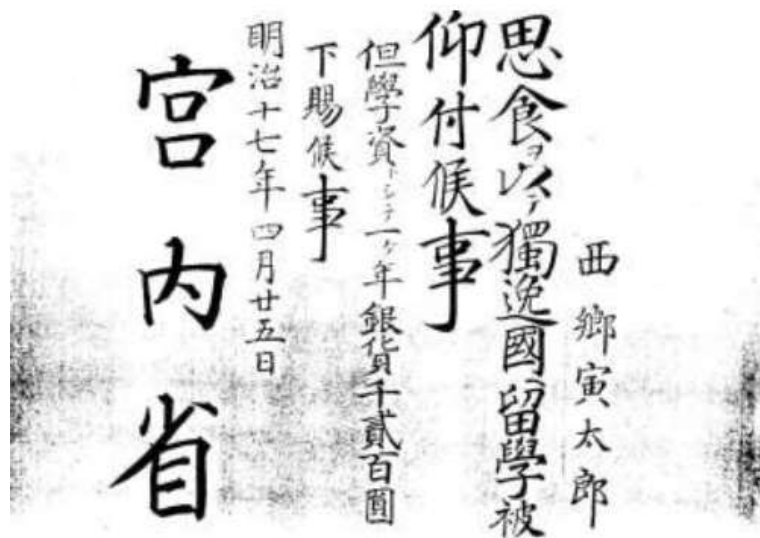
さて、その西郷寅太郎が明治天皇の思召召しで、軍人としてドイツに留学したことは御存知だろうと思うのですが、その留学時代については、ほとんど詳らかではありません。ポツダムにあった陸軍士官学校を卒業した後、引き続きプロシヤ歩兵第32連隊にドイツ軍の少尉として勤務したとなっております。ただ、詳らかでないといっても、誰もちゃんと調べていないだけなのじゃないか、という気もするんですが…。



例えば、この歩兵32連隊というのは通例どおり3個大隊で編成されているのですが、第1・第2大隊はマイニンゲン駐屯。第3大隊は師団司令部のあったカッセルに駐屯という変則な形になっています。その第3大隊も明治28年（1895）以降はマイニンゲンに移駐と書かれているのですが、西郷少尉はその前に日本に帰国しています。だから寅太郎が第1大隊か第2大隊にいたのなら、彼はマイニンゲンにいたのだし、第3大隊勤務だったのならカッセルにいたことになるのですが、若き日の寅太郎がどちらにいたのか。どの大隊にいたのか明らかにする史料が見つからない以上、残念ながら特定することはできていません。

ドイツの軍事史を研究している人が、あちらの軍関係の文書館でも調べると、意外に簡単にわかることなのかも知れませんね。余談ですが、『西郷どん』の鈴木亮平という俳優は、東京外語出でドイツ語も英語もペラペラなんだそうですが、NHKで彼でも使って、西郷寅太郎を追ったドイツ取材の番組でもやらないものですかね。





留学の辞令

エピソード3

さて、日清戦争を前に寅太郎はドイツから帰国します。日清戦争では台湾占領に出動していますが、続く日露戦争の際には、寅太郎は黒木為楨大将の第一軍に外国武官接伴掛として配属されています。黒木第一軍、奥第二軍、乃木第三軍と編成されたその第一軍。黒木大将という人は、鳥羽・伏見の戦いでは薩摩藩小銃隊を指揮して幕府歩兵を破ったという豪傑でして、また面白半分に相撲を挑んできた明治天皇を容赦なく投げ飛ばしたという薩摩武士です。

ところで観戦武官というものは、第三国の軍事情報を、スパイのような非合法の形でなく、合法的に実戦の場で収集しようとするものです。また戦闘に干渉してはならず、あくまでも中立の立場でなければならないことになっているのですが、この時、黒木司令部が迎えた外国武官はイギリス陸軍のサー・イアン・ハミルトン中將、ドイツのマックス・ホフマン大尉、フランスのコルウォザール男爵など14名でした。余談ですがこの時、乃木大将の第三軍には観戦武官として、アメリカのアーサー・マッカーサー將軍が息子のダグラスを連れて従軍しています。あのマッカーサーは若い時に、乃木大将に会っているんですね。

さて、寅太郎が命じられた接伴掛の働きぶりですが、防衛省防衛研究所所蔵の「西郷少佐勲績明細書・履歴書」という公文書（大本営・日露戦役 M38-23-136）を見てみると、

「西郷寅太郎 右ハ明治37年3月4日大本営陸軍幕僚付仰付ラレ、同4月16日外国武官接伴掛命セラレ、同30日東京出発。第一軍所在地ニ赴キ平和克復ニ至ルマテ同一ノ職務ヲ執リ、尚ホ38年4月以降ハ第一軍接伴掛ノ首席トナリ、拮据精励。

特ニ軍司令部ト外国将校等トノ間ニ在テ、互ニ意思ヲ疏通シ、毫モ支障ヲ来サス。寛嚴宜シキヲ得、誘導ノ方ヲ誤ラス。全戦役間、国際ニ関係アル、而カモ複雑ニシテ無興味ナル勤務ヲ完フシ、外国武官ノ同情ヲ我ニ寄スルノ結果ヲ見ルニ至レリ。其成績勲功甲者ト認ム 明治38年10月16日 大本營陸軍幕僚付陸軍少将村田 惇」

と、寅太郎の拮据精励（きっきょせいれい。勤勉に心を砕くこと）ぶりを伝えています。少しでも日本の味方を増やしたかったこの戦争で、「外国武官ノ同情ヲ我ニ寄スルノ結果ヲ見ルニ至」ったというのですから、きっと外交官的な資質に恵まれていたのでしょう。そこはやはり、ポツダムで士官候補生として、貴族的教育を受けた寅太郎ならではのことだったでしょうね。

ところで、戦争も終盤を迎えた明治38年（1905）3月、奉天を見下ろす黒木司令部からは、敗戦の責任をなすり合い、奉天駅頭で殴り合いの喧嘩を演じるロシアのサムソノフ將軍とレンネンキャンプ將軍の姿が望見できた、という伝説があります。日本陸軍としては最後の力をふり絞った奉天の会戦に勝つことができた。そのとき、ロシアの將軍は責任をなすり合って喧嘩をしていたということです。

それから9年後、大正3年（1914）8月、第一次世界大戦が勃発し、マックス・ホフマン参謀は東部戦線、タンネンベルクの戦場でロシアの大軍と対峙します。二手に分れたロシア軍がドイツ軍を挟撃しようとしていたのです。その時ホフマンは、この左右に分かれたロシア軍の指揮官があのだとサムソノフとレンネンキャンプであることに気付きます。

あの二人が心を一つにできるわけがない。それを見抜いたホフマンの作戦によって、ドイツ軍は大勝利を収めました。

このタンネンベルクのニュースは、ドイツと敵対している日本にも大きく伝えられました。かつて奉天で接遇に当ったホフマンが、観戦の成果を遺憾なく発揮したことを、習志野の西郷中佐は、果して気付いたのでしょうか。

なお、このホフマン参謀ですが、日本の軍人から、上野の西郷隆盛像にそっくりだと言われた偉丈夫です。その写真をご紹介しますおきましょう。



果して寅太郎さんが、親父に似ていると思ったのかどうか。その辺は残念ながら、定かではありません。

エピソード4

さて、日露戦争の後はいよいよ、第一次世界大戦、日独戦争になるわけですが、板東の「第九」を初め、ともすれば日本側の捕虜に対する厚遇ぶりばかりが強調される日独戦争ですが、逆にドイツに捕らわれた日本人捕虜の待遇はどうだったのでしょうか。「臉の母」「一本刀土俵入」といった股旅物で知られる劇作家・長谷川伸という人は「日本捕虜志」という本を著しまして、丹念な資料調査を踏まえ、古来日本人が捕虜というものをどのように遇してきたか、捕虜と武士道といったものを後世に伝えようとした人ですが、一方で、「印度洋の常陸丸」という本では日独戦争の折、「黄禍論」を信奉するドイツ人によって日本人捕虜がいかに虐待を受けたかを明らかにしています。



日本郵船 常陸丸

日本郵船の欧州定期航路「常陸丸」は大正6年（1917）8月、横浜港を出港しました。乗組員117名、船客は約40名だったそうですが、インド洋上に達した9月26日、イギリス商船を装ったドイツ仮装巡洋艦「ヴォルフ」によって砲撃を受け、拿捕されてしまいます。乗組員の即死11名。インド人乗客2名が海中に落ち行方不明となり、重傷者も数名あったといえます。残りの乗客と乗組員は俘虜として「ヴォルフ」に収容され、真夏のインド洋で最下層の三番船艙に押し込められます。また11月8日には、常陸丸から船荷がすべて運び出され、常陸丸の船体は爆破されてしまいました。「ヴォルフ」はドイツを目指し大西洋を北上し、翌年2月には北極海に入りますが、責任感の強い常陸丸の富永船長は遺書を残して自決を遂げてしまいます。こうしてドイツ各地の収容所、馬小屋などに押し込まれた日本人俘虜は厳しい寒さの中で必死に生き延びます。この年の11月にドイツが敗北し、救出された彼らは翌大正8年（1919）3月、神戸に帰着する、という物語です。



常陸丸が撃沈される瞬間



収容所に入れられた常陸丸の乗員

日本人俘虜はこればかりでなく、ドイツに留学中であった者など、非戦闘員多数が捕らわれ、大正7年6月にはドイツ国内に129名（内女性3名）、オーストリア・ハンガリー国内に6名（内女性3名）が過酷な毎日を過ごしていたことが記録されています。

女性というのは、どうも水芸の興行などして歩いていた一座が捕まったようです。

日本においては、大学のドイツ人教師など既に日本に居住している民間人を抑留してしまったり、財産を没収するようなことは、まったく行っていません。例えば、昭和天皇にドイツ語を教えた東京高商のハイゼ博士なども、通常どおり講義をしています。ドイツ側の在独日本人に対する容赦ない措置は、これとは正反対だったことになります。

エピソード5

ところで、ドイツというと「親日的な国」だとか、明治以降の近代化に大きな影響を与えてくれた国、また三国同盟の「戦友」といったイメージが語られるのが常ですが、しかし史実を丹念に振り返ってみるならば、決して親日的ではないし、ドイツのアジア戦略は常に中国を基軸にした、実に身勝手なものであったことがよくわかると思います。

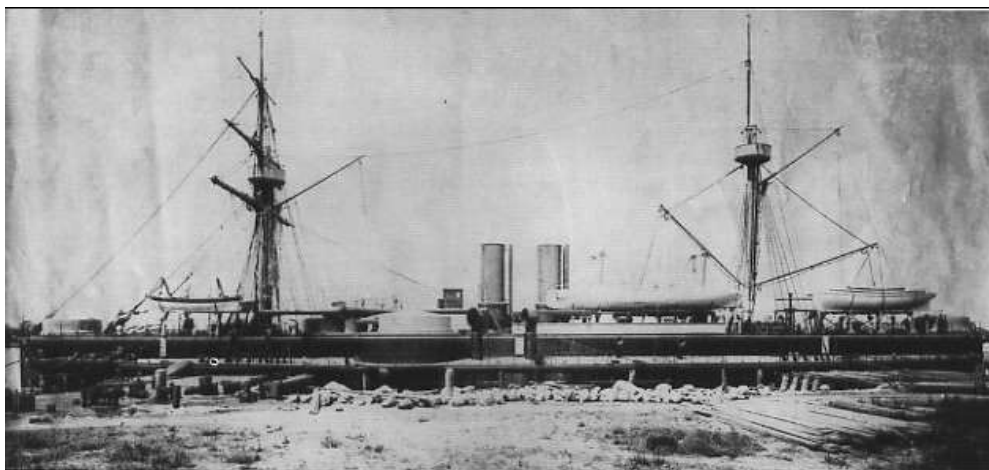
今もメルケルは、大変に中国寄り、反日・反米的な政策で押し通していますね。ハンブルク・サミットではトランプを端に追いやり、習近平を真ん中にして記念撮影をやりました。東日本大震災のときは、台湾やインドの救援隊が必死の働きをしているのに、ドイツの救援隊は放射能怖いと、バスから降りもしないで帰ってしまった。とにかく現在はギクシャクしていますね。





日清戦争の「黄海の海戦」で知られる軍艦「定遠」「鎮遠」なども、ドイツが清国に譲渡したものでした。この日清戦争に日本が勝利を収めると、従兄のドイツ皇帝ヴィルヘルム二世の唱える「黄禍論」の影響を受けたロシア皇帝ニコライ二世は、露仏同盟の盟友フランスと共に、日本に三国干渉を行います。日本がせっかく清国から割譲を受けようとした遼東半島を、吐き出せと干渉してきたのでしたね。そして、日本に遼東半島を断念させたドイツは、一方でドイツ人宣教師殺害事件を口実に、清国から山東半島を奪うわけです。

見方によっては、続く日露戦争と青島をめぐる日独戦争は、この三国干渉への復讐戦とも言えなくもないですね。



定遠



黄禍論の風刺画

東方に大仏が見え、それをキリスト教国の守護女神らが迎え撃とうとしている

戦争というものは、負けた側に憎悪を生み、これがまた次の戦争の引き金を引く。戦争をなくすのならば、この憎悪と報復の連鎖をどこかで断ち切り、友情に換えてやらなければならない。日独戦争のドイツ捕虜は、歴史上まれなことに、こういうことに成功した実例だと言えるのですが、やはりそればかりではなかったようです。日独戦争が次の戦争の引き金を引いてしまった事実はあるのです。いつの日か青島の仕返しをしてやろう、日本人に一泡吹かせてやろうと考えたドイツ人も決して少なくはなかったのです。

第一次世界大戦の終結と同時に、ドイツは失った中国における権益の回復に乗り出します。ヴェルサイユ条約で国防軍の規模を制限されたため、ドイツの軍需産業は生き残りの道を探ります。そしてまた、いつの日か軍事大国ドイツを復活させることを目論んでいる国防軍幹部にとっても、ドイツの軍需産業を温存しておくことが必要でした。そこで海外に合弁会社を設立し、そこで兵器を生産するのであれば、ヴェルサイユ条約に抵触しないことに目をつけます。国防軍兵務局長ハンス・フォン・ゼークト将軍は、ソ連と秘密軍事協定（1923）を結び、農業用トラクターという形で戦車製造の技術をソ連国内に移転します。将来、ソ連製トラクターを逆輸入し、戦車に改造して国防軍を再建しようという、遠大な構想であったといえます。そして、次に彼らの目が注がれたのは中国でした。

大正15年（1926）、中華民国要人とドイツの退役軍人マックス・バウアーの間で、中国への投資の可能性を探る会談が行われ、翌昭和2年（1927）にはバウアーに蒋介石の軍事顧問に就任するよう要請が行われます。そこでバウアーを団長とする軍

事顧問団が組織され、国民革命軍の近代化と再編成が行われるのです。バウアーは漢口で病死しますが、顧問団による指導は続けられました。昭和6年（1931）、満州事変に続く熱河作戦の際には、ゲオルク・ヴェッツェル中将に指導された中国軍が、万里の長城付近で日本軍と交戦した事実があります。

昭和8年（1933）、ナチス政権が誕生しますが、ゼークト将軍は上海に招かれ、蒋介石の上級顧問となります。ドイツ製武器を装備した中国軍20個師団を新編し、上海周辺に外敵を迎え撃つ強固な防衛線、これを通称「ゼークト・ライン」といいますが、これを建設する計画が始められます。外敵というのは、当然日本を想定しているわけですが、ゼークトは昭和10年（1935）に病気で帰国します。彼は蒋介石に対し、国共内戦を止めて日本一国だけを敵とし、日本への敵愾心を養うことこそが肝要だと提言していました。

一方、昭和9年（1934）にはベルリンに、中国内のドイツ産業を統括する国策会社「ハプロ」が設立されます。そして中国との間に、「中国稀少資源及びドイツ農業・工業製品交換条約」、いわゆるハプロ条約が調印され、中国産の軍需資源とドイツ製品の交換貿易が協定されます。この条約は名前だけ見ると通商協定のように見えますが、ドイツ工業製品を「武器」と読み替えれば、その軍事同盟的性格が浮かび上がってきます。実際、ハプロ条約によって中国軍制の近代化と再編成は一気に促進されました。この写真をご覧ください。





耳からうなじの部分覆ったドイツ式のヘルメットをかぶり、折り襟のドイツ軍服にドイツ製自動小銃を下げた東洋人の兵隊が写っています。ああ、日本はナチと同盟国だったから、日本の兵隊がドイツ兵の恰好をしているのだろうという人がいますが、それは大間違いです。これはハプロ条約の結果生まれた中国兵です。こういうドイツ装備の中国兵が、続々と生み出されていきました。

ゼークトから軍事顧問団を引き継いだのは、アレクサンダー・フォン・ファルケンハウゼンという軍人でした。彼は、大正3年（1914）、日独戦争が起った時は、東京駐在のドイツ武官でした。目の前で青島の喪失という屈辱を味わっていたので、日本に対しては、いつの日か青島の復讐をしてやる、という固い意志を持っていたといひます。昭和10年（1935）8月、このファルケンハウゼンが蒋介石に「対日戦略案」というものを提出します。その中で、日本が中国を攻撃すれば必ず英米と対立し、またソ連への防備が必要になる。日本にそのような、多面的国際戦争を長期に遂行できる能力はない。そこで中国が対日戦争に踏み切るとすれば、まず上海と漢口にいる日本軍を奇襲先制し、主導権を握った上で長期戦に持ち込み、できるだけ多くの外国に介入させれば日本は必ず敗北する、と、まったくその後の歴史を予言したようなことを主張しています。そして盛んに、だから今の内に対日先制攻撃に踏み切るべきであると、この戦略案の中で煽り立てているのです。



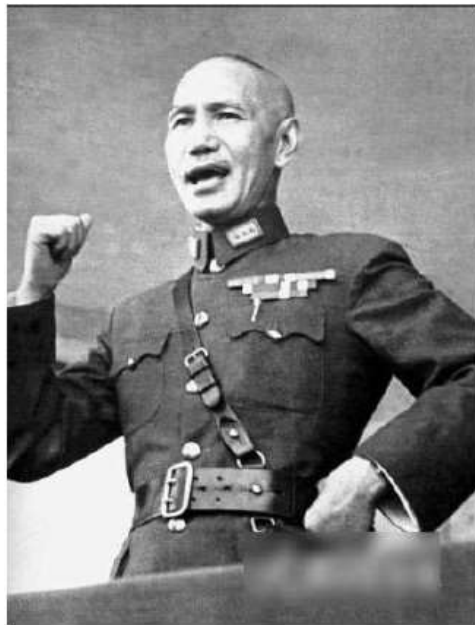
アレキサンダー・フォン・ファルケンハウゼン（1878～1966）

一方、ドイツ指導部においては、このような伝統的な中国政策を取る国防軍や外務省と、それに対抗する新興勢力との間に対立が生じていました。新興勢力とは、国防軍に対してナチス親衛隊、これはナチ党の私兵軍団ですね。政党が軍隊を持っているというのも日本では考えにくいことですが、国家の軍隊である国防軍に対して、ナチ党の軍隊である親衛隊がライバル関係にあります。また、国家の外務省に対して、この時期、まだヒトラーの外交政策顧問でしかなかったリッベントロップの個人事務所が対立関係にあります。彼らは新しいアジア外交の基軸として日本に注目しました。国防軍、外務省という帝政時代からの伝統勢力が極東政策では依然として中国に軸足を置いているのに対して、新興勢力であるナチは日本に注目した。ドイツ側はこのような背景から、昭和11年（1936）「日独防共協定」の締結に至るわけです。その際、かつて習志野収容所にいたフリードリッヒ・ハックが、リッベントロップの片腕として活躍したわけです。

これ以降、言わばヒトラーは、片手で蒋介石と握手しながら、もう一方の手で軍国日本とも握手してみせたわけですが、このような両天秤に気が付いている日本人は少なかったようです。

また今日、この日独防共協定をもって、「日本はナチス・ドイツの同盟国となったのだ」と言う人も多いようですが、なるほどこの防共協定には秘密協定が付いた一種の軍

事同盟条約ではあるものの、この協定は後の三国同盟（昭和15年（1940））と違って、「防共」というように、対ソ連限定の条約なのです。ですから、翌昭和12年から中国で進行していく日華事変に関しては、ヒトラーはフリーハンドを持っていたということに注意しなければなりません。現代の歴史書でも、ここを忘れているものが多いですね。日本のドイツへの接近ということも、ただヒトラーにあこがれて、あるいはヒトラーの分け前に預ろうとしてのこの接近していったかのように書いている本が多いのですが、なるべくヒトラーを日本側に引き寄せて、蒋介石とは早く手を切らせたいというのが日本側の本音だったことを忘れていけません。



蒋介石



ドイツに留学した蒋経国（左）、蒋緯国（右）

翌昭和12年（1937）7月、華北で盧溝橋事件が発生します。そして紛争が拡大していく中で、蒋介石は意表を突いて、突如上海の日本海軍陸戦隊を襲います。8月13日のことで、いわゆる第二次上海事変ですね。歴史書はよく、「戦火は華北から上海に飛び火した」などと書くのですが、しかし、本当の火事と違って戦争は、誰かの意思がなければ自然に飛び火することなどありません。ファルケンハウゼンの献策を入れた蒋介石が、上海決戦に踏み切ったわけです。日華事変は日本の侵略だ、というのが現代では異論を見なくなってしまいましたが、この第二次上海事変は蒋介石側の完全な奇襲攻撃でした。そして、かねてからクリーク（水濠）とトーチカを張り廻らせ、手ぐすねをひいて待ち構えていた「ゼークト・ライン」に誘い出された日本軍は、たちまち苦戦に陥ってしまいます。



盧溝橋ではなく、第二次上海事変が日中全面戦争の始まり

5年前の昭和7年、満州事変の時も第一次上海事変というのが起りますが、上海の防衛線はドイツ顧問団の指導の下、5年前とは一変して堅固なものになっていました。ここで日露戦争の旅順攻防戦にも匹敵すると言われるほどの大被害を出してしまった日本軍は、しかしようやく杭州湾上陸によって戦局を転換させると、首都・南京を目指して進撃を開始します。そして、南京さえ落とせばこの戦争も終わるぞということで、殺到していった。



いわゆる大虐殺があったとか、なかったとかいう話はその南京攻略の話なわけですが、ともかく中華民国の首都だった南京は陥落し、蒋介石は漢口、さらに重慶と逃げ回ることになります。

このような展開に、さすがのヒトラーも寝覚めが悪かったのでしょう。駐華ドイツ大使トラウトマンに、日華間の和平斡旋を指示しています。しかし南京が陥落したことで強気になった日本の近衛首相は、有名な「蒋介石を対手とせず」の声明を出してしまいます。「蒋介石を対手とせず」とは、実はトラウトマン工作を蹴る、ということだった。トラウトマンの斡旋による和平交渉に応じず、蒋介石が降伏するまで戦争を続行するぞ、という宣言をしてしまったわけですね。これによってヒトラーは腹の中で、日本よ、日華事変に火を点けたのはドイツだとは、くれぐれももう言わないでくれよ、と思ったに違いありません。そして蒋介石もこのあたりから、ドイツよりもアメリカ、イギリスを頼るようになりますから、ファルケンハウゼンの戦略どおり、日本対米英という対立がぐっと拡大していきます。



近衛声明「蒋介石を對手とせず」

今日、日華事変というものは、盧溝橋事件によって始まった日本の侵略だ、とすることと異論を見ません。そして、日本はナチス・ドイツの「共犯者」だということになっているわけですが、しかし実際のところ、ヒトラーが日本に友情を抱いたことなどということは、一度もないわけです。むしろ、日本と蒋介石を両天秤にかけて平然としていたわけですね。

ところで、今も言いましたが、南京攻略戦の折に、悪名高き「南京大虐殺」という事件が発生したとされているわけですが、本当に大虐殺があったのか、違うのか、といった話はそもそも私の手に余ります。今日はそういったことではなく、この渦中に、かつて習志野収容所にいた老ドイツ人がいましたので、そのことだけご紹介しておきたいと思います。

日本軍が南京城に迫ると、南京にいた10数人の外国人が「南京安全区国際委員会」を組織し、城内の一画に民間人を保護する「安全区」を設定します。戦闘の場で軍人が、敵の軍人を倒すのは、いかに数が多くとも「虐殺」とは言いません。それは正当な戦闘行為だからです。「南京大虐殺」と言われる事件はそうではなく、この難民であふれている安全区に日本軍が乱入し、無辜の民を老若男女の見境なく、30万人、あるいは40万人を殺戮しまくった、といわれる事件なのだけれども、その当否はともかく、国際委員会の委員長を務めたのは、ジョン・ラーベというドイツ人でした。彼はジーメン

ス社の駐在員として中国に約30年滞在しており、ナチス党南京支部副支部長でもありました。

この国際委員会にはもう1人、エドゥアルト・シュペルリングというドイツ人がいた。笠原十九司「南京難民区の百日 虐殺を見た外国人」(岩波現代文庫)という本によれば、ドイツ人。ドイツ資本による上海保険会社の南京支店長。南京安全区国際委員会委員、ナチス党员。日本兵士の暴行に対して体を張って阻止し、難民区の“警察委員”といわれた。1914年の第一次大戦(日独戦争)で青島戦に参加。日本軍の捕虜となり、四国の捕虜収容所で4年間を過ごしたことがある。

と紹介されています。彼らが混乱の南京でどのような活躍をしたのかは、ラーベの手記「南京の真実」、あるいは笠原氏の書籍に譲ることとして、ここでは話を、大正の第一次大戦に戻すことにしたいと思います。

今日、防衛省防衛研究所に残されている俘虜名簿を調べると、エドゥアルト・シュペルリングは当初福岡、後に習志野に移送され、習志野で解放されていることが明記されています。またエドゥアルトにはエーミールという弟がおり、やはり俘虜になっているのですが、彼は福岡から大阪に移され、さらに似ノ島(広島市)の収容所で解放の日を迎えています。なお、シュペルリング姓の俘虜はこの2名しかいません。笠原氏は、シュペルリングは四国の捕虜収容所にいて、しかもそこで虐待されたため、日本軍には批判的な立場だった、と書いているのですが、いったい何を見てそう書いているのか。私、岩波書店に手紙を書いたことがあるんですが、いまだに返事ありません。別に笠原氏の本を批判しているわけではない。ちょっとしたバグなのだろうから教えてあげているのに、無視することはないじゃないかと思いますが、まあ相手にしてもらえないのでしょう。相手は天下の岩波書店と大学教授様ですからね。市役所の事務屋のおっさんでは、勝負になりません。まあゴマメの歯ぎしりというものです。

ところで、この兄エドゥアルトについて、習志野にいたドイツ兵、カール・クリューガーの回顧録には、次のような興味深い記述が出てきます。エドゥアルト・シュペルリングは習志野の捕虜オーケストラでは打楽器を担当し、また大変な中国通でした。クリューガーはこう書いています。

...もう一度、収容所楽団のことを述べる。太鼓打ちとして、太った腹と黒い尖ったあごひげの、「中国だんな」が活躍していた。長らく中国に定住していた連中は、戦友たちから「中国だんな」と呼ばれていたのだ。シュペルリング、この太鼓打ちはそういう名前だったが、たぶんもう10年以上北京におり、もし私が間違えていなければ、顧問として蒋介石のもとで活躍していた。彼(シュペルリング)は、流暢な中国語を話し、中国人の妻を娶っていた。シュペルリングはしかし、楽譜がまるで読めず、それで彼はいつも、いつ太鼓の皮をぶん殴ったらよいのか、おぼつかなかった。楽長と太鼓打ちは、しかし間もなく、息が合うようになった。太鼓が鳴り響くべき時になるといつも、シュペルリングは楽長から左こぶしのサ

インを受け取り、そして一撃を下ろすのだった。

中国人の妻を持ち、蒋介石とも関係が深い人物であることがわかります。

蒋介石の顧問というのですが、大正のこの時期、蒋介石はまだ一介の青年将校でしかありません。クリューガーはリアルタイムではなく、後から当時を回顧してこの記録を書いていますから、シュペルリングが当時から既に蒋介石の顧問であったように勘違いしたのでしょうか、いずれにしても習志野を解放されたシュペルリングは中国に戻り、上海保険会社の南京支店長、また蒋介石とは特別の関係を持つ中国通のドイツ人として、17年後の南京攻防戦を迎えたことは間違いありません。

ラーベの手記「南京の真実」の日本語版が出版された際、大方の書評は「中立の第三者が記録した南京事件の真相」「同盟国のナチス党員が記録しているのだから、内容は真実だ」といった趣旨でした。中には「あのナチですら呆れた、日本軍の蛮行」などというものもあったと記憶します。しかし以上に見たように、ラーベやシュペルリングは決して「中立の第三者」ではない。ハプロ貿易の第一線にある、蒋介石とは特別の関係にあるドイツ人であった。果してその証言が信頼できるものであるか否かは、今日の主題から余りにもかけ離れてしまいますから他日を期することにしたいと思いますが、しかしこういった意外なことが、習志野収容所というローカルな歴史史料からもきちんと裏付けられるというところは、実に面白いものだと思います。



南京難民区国際委員会

ラーベ（中央の黒服・眼鏡）とシュペルリング（その右、帽子を持つ）

さて、その後の日独関係、また日中間に火を点けたファルケンハウゼンがその後どうなったのかをお話しておく必要があるでしょう。

日本と対ソ防共協定を結んでいたヒトラーは昭和14年（1939）、臆面もなく今度はソ連と「独ソ不可侵条約」を締結します。日本がちょうど、ノモンハンでソ連と敵対している最中の出来事でした。ドイツとの提携強化を模索していた平沼騏一郎内閣はこの身勝手さに呆れ、「欧州の情勢は複雑怪奇」という名言を残して崩壊してしまいます。こちらがノモンハンで苦しんでいるときにソ連と握手してしまったのですから、もはや防共協定など事実上無効であり、ヒトラーが信用できる相手ではないことは誰の目にも明らかだった。それなのに日本は、再び昭和15年（1940）の日独伊三国同盟に向って傾斜していくわけですね。

この独ソ不可侵条約締結直後の昭和14年9月1日には、ドイツ軍のポーランド侵攻が始まります。そして、東側に押されたポーランドの背後からスターリンが襲いかかって、ポーランドは分割されてしまいました。

後世、このめざましい電撃作戦の勝利に幻惑された日本が、ヒトラーにあこがれて接近していったのだ。日本人は、世界征服をたくらんだナチの共犯者なのだ、といったようなことが言われているのですが、しかし実は、この時期に至っても、ドイツの蒋介石への支援は終ってはいません。何とかしてドイツに、日華事変への介入を止めさせたい、という日本側の狙いがヒトラーへの接近を招いたという側面があることは、先ほども言いましたが、今日誰も顧みることはないようです。

いわゆる「バスに乗り遅れるな」ということで再びドイツ、それにイタリアと三国同盟を締結した日本は、それに続き、日ソ間の関係強化に乗り出します。昭和16年（1941）3月、ベルリンにヒトラーを訪問した松岡外相はその足でモスクワに行き、スターリンと日ソ中立条約を締結するのです。ドイツの独ソ不可侵条約と合せて日ソ間も提携させることで、「日独伊+ソ」という対米英大同盟を構想していたのだといいます。しかしその3か月後、この年6月、対英戦の決着もついていないドイツは、その独ソ不可侵条約を突然かなぐり捨て、今度はソ連攻撃を開始します。またしても「複雑怪奇」なドイツ外交でした。松岡外相はベルリンまで行って、ヒトラーがソ連攻撃を考えているということを見抜けなかった。そして、モスクワで満面の笑みを湛えて握手を求めてきたスターリンが、実は独ソ間の緊張を察知しており、背後から日本に攻撃されないよう手を差し出しているのだという裏事情も、残念ながら日本には見抜けなかったのです。

その半年後、日本は真珠湾を攻撃し、遂にアメリカを参戦させてしまいます。そして、三国同盟ではドイツに、対米宣戦をする義務は規定されていなかったのですが、ここに至ってヒトラーは何を考えたか、対米戦を始めてしまいます。このあたりの、ヒトラーの決断も謎なのですが、これで独英、独ソ、独米、そして日米・日英と戦争になってしまい、しかし日ソ間は中立だという不気味な構図になってしまうわけです。同盟という

にはあまりにも足並みの揃わないドイツと日本ではありました。そして、松岡が締結した日ソ中立条約は、後にソ連によって一方的に破棄されます。これが日本にとっては留めの一撃を招くことになったのは、改めてお話ししなくても、皆さん御存知のことと思います。

ところで、「青島の報復」に燃えていたあのファルケンハウゼンは、その後どうなったのでしょうか。昭和13年（1938）、ノイラートに替りリップントロップが外相に就任したことで、ドイツの日本重視の方針は決定的となり、ファルケンハウゼンは帰国します。

昭和15年（1940）からはドイツ軍占領下にあるベルギーの司政長官を務め、管内のユダヤ人の強制収容所への移送、レジスタンスの処刑を推し進めたそうです。

しかし、昭和19年（1944）7月20日に発生したヒトラー暗殺未遂事件では、実行犯グループと親しい関係にあったため関与が疑われ、ゲシュタポに逮捕され強制収容所送りになります。翌昭和20年（1945）5月、ナチス・ドイツが崩壊する中で、連合軍によってダッハウ強制収容所から救出されますが、しかし戦争犯罪人として再び逮捕され、昭和26年（1951）3月、戦犯裁判で懲役12年の刑を宣告されます。しかし、反ヒトラー派として強制収容所送りになったという経歴が幸いしたのか、また、ユダヤ人やベルギー人を実は出来るだけ救おうとしていたのだという反証が出されまして、また既に高齢で患っていることなども考慮され、刑の執行は停止されて、昭和41年（1966）に死去しています。

戦後も蒋介石との親交は続き、昭和33年（1958）のファルケンハウゼン80歳の誕生日には、すでに大陸から台湾に追われていた蒋介石から3千ドルの小切手が送られたということです。

日本を亡国に導いた日華事変は、実はドイツの仕業だった。そういう見方も決して出来ないわけではない。しかし少なくとも、大正時代、青島で敗北を喫したことを怨みに思っている者が、蒋介石を煽動して次の戦争の引き金を引かせていた。ヒトラーは蒋介石とも同盟関係にあったのだということは、「不都合な歴史」として今日では封印されているようです。

ドイツのヴァイツゼッカー元大統領は、「過去に眼を閉ざす者は、未来に対しても盲目となる」との名文句を残しました。また、近年ドイツからは、「我々ドイツ人は戦後60有余年、真剣に過去を反省し、近隣諸国に謝罪してきた。それに比べて日本人は、何もしていない」などといった言説が目立つようになってきました。しかし、過去に眼を閉ざさないドイツ人は今こそ、実は中国人と日本人にも謝罪しなければならないのではないかと私は思うのです。

エピソード6

さて、習志野収容所からだいぶ離れたところまで来てしまったようですので、最後はまた、話題を西郷寅太郎さんに戻して終りにしたいと思います。



明治29年（1896）、寅太郎は園田ノブという女性と結婚します。披露宴は西郷従道の目黒の別荘で行われ、主賓は勝海舟であった。父・隆盛を追憶する海舟の名調子に、一同静かに聴き入ったということが書かれております。

実は、明治天皇からドイツ留学を命じられたとき、寅太郎は最初嫌がっています。すると説得役を任された海舟が、「天皇さんの命に背くんじゃ、おめえさんも親父と同じで、鹿児島に帰って謀反でも始めるおつもりかい」と言って脅かした。それで渋々、ドイツ留学に出発したという話もあります。それで結婚式にも勝の旦那が出てきて、「おい、寅さん。よかったねえ。親父がいたら、さぞ喜ぶことだろうよ」てなことを吹いたんでしょうな。

さて、花嫁の父・園田實徳という人も薩摩人です。かつて藩主・島津忠義の小姓を務め、西郷隆盛の知遇を得ていた。維新後は北海道開拓使として函館に渡り、実業家として北海道の発展に貢献する一方、近代競馬の発展に尽くした、という人です。明治33年（1900）北海道共同競馬会社の発起人に名を連ね、園田牧場を創立。また東京・目黒競馬場の建設にも携わる、とあります。目黒競馬場というのは、その後、府中に移転します。また余談ですが、北海道の園田牧場の経営は、実弟の武彦七に委ねられます。その曾孫が、当代のスター騎手武豊、武幸四郎兄弟だとのこと。

さて、西郷家に嫁いだ長女であるが、競馬に大金を投ずる磊落な父の気風を受け継いだのか、何事も派手好きな女性だったようです。麻布に元日銀総裁の屋敷だった邸宅を購入し、女中13人を雇い、衣装から芝居見物、遊山と浪費を続けたといひます。侯爵を授かったとはいえ、陸軍からの給料は歩兵大佐に過ぎず、実家の援助があつてこそのことだったようですが、大正6年に父・實徳が死去すると共に、西郷侯爵家の財政は窮

乏に追い込まれてしまいます。大正8年に寅太郎が習志野で死去した際には、4万円の債務超過に陥っており、麻布の邸宅も売却を余儀なくされ、西郷家は、大正10年にノブを離縁したというんですね。

「東京日日新聞」大正8年5月19日は「西郷家人手に渡り、母堂は都落ち」と題し、家を売払うて一家の都落ちをよそに、老いたる南洲翁未亡人は、尚故人の高吟＝子孫の為に美田を買わず＝の一句を誦しているだろうか、と茶化しています。母堂というのは、あの上野の銅像が「こんな人じゃなか」と言ったという、例のお糸さんですね。



麻布市兵衛町の西郷邸



ノブ夫人

このように、西郷家破綻の原因はノブ夫人の浪費癖であったとされているのですが、果して原因はそればかりであったろうか。私は疑問に思います。それというのも、捕虜収容所に関する新聞記事を眺めていると、不思議な事件があるのです。

それは、日独開戦後も営業を続けていた独亜（ドイツ・アジア）銀行横浜支店が、大正5年9月に営業停止を命じられたことから始まります。当時の「東京日日新聞」から拾ってみましょう。

大正5年9月27日（水）

●独亜銀行の営業停止

大蔵大臣よりの命令／昨日限り閉店す

俘虜、独逸人の貯金多し

大蔵大臣は、25日附を以て、銀行条例第8条第2項に拠り、横浜山下町180番なる独亜銀行横浜支店に対し、営業停止を命令し、同命令は26日、神奈川県庁を経て横浜市役所に到達せしより、坂上通訳は、早速同支店に到

り命令書を伝達せしに、同支店支配人エーチ・コンネル氏は、命令は遵奉すべきも、銀行には日本にある独逸捕虜4000余名並に京浜間在留の独逸人約300名の貯金あり、是等の支払をも同時に停止さるるに於ては、誠に迷惑を感じるとて、種々懇談する所あり。主務省に交渉したるも、命令は絶対的の営業停止なればとて、同銀行は26日正午限り閉鎖したり。同支店の資本金は75万円にして、其開業は明治38年11月1日にて、本店は上海バンドにあり、資本金751万上海両なる由。

捕虜4000余名とは、各収容所のほとんど全員です。そして、このニュースを聞いた習志野収容所では、騒動が発生するのです。「俺の預金はどうなるんだ」とばかりに、西郷所長に詰め寄り、所内は陰悪な空気に包まれたのでした。

大正5年11月5日（日）（房総版）

●俘虜騒ぐ首謀者は18名

独重銀行の預金引出に就て

目下習志野俘虜収容所に収容中なる独逸俘虜は、此程営業を停止されたる横浜独重銀行の預金引出に関し、西郷所長の誠意を認むる能わずとて、大に激昂し、預金者18名首謀となりて頗る不穩の状あり。或は、彼等が一団となり、西郷所長の面前に於て其不誠意を痛罵せんなど絶叫し居る者も少からず。形勢刻々に陰悪に陥りつつあるより、同所に於ても極力鎮撫策を講じ居れるが、事件の真相は極めて簡単にして、彼等の内18名が俘虜として日本に來りたる際、独重銀行に平均一人30円、全部540円程の預金をなしたるが、同行は営業停止の悲運に接したれば、之を聞ける俘虜は、俄に預金引出の請求をなし、既に1箇月を経過せるも、尚、何等の回答なきより、銀行の無法並に収容所長の不誠意に就て不平を鳴らし、甚だしきは、日本政府が冷淡なりとて悪罵を放つに至れるものあり。因に、独重銀行は大蔵大臣に対し、預金引出しの特別除外例を申請し、一方横浜市役所に対しても、急遽なる便宜取扱方を懇請しあり。殆ど犠牲的に奔走し居れど、捗らず。為に、俘虜等の誤解を招くに至れるなるべしと。

ところが5日後の新聞は、事態は解決したと伝えているのです。

大正5年11月10日（金）（房総版）

●俘虜紛擾事件解決

預金払渡に決す

習志野俘虜収容所に在る独逸俘虜18名が、横浜独重銀行の預金引出に関し西郷所長の誠意を解せず、却って不穩の行動に出でんとしたること、既報の如し。其後、収容所にては、同行に対して数回交渉をなしたる結果、同行が大蔵大臣に宛てたる特別除外例請求を横浜市役所に差出せる便宜取扱い方請求に依り、来る30日迄には総預金540円の払渡をなすことに決定し、

同所内に起れる紛擾事件も無事解決せり。

西郷所長から独重銀行に交渉した結果、大蔵省に特別除外請求を出すのを待って18名分の540円が引き出せるようになる、ということで、一件落着した、というのですが、私が不思議な事件だというのは、全国の各収容所の4000人が「俺の預金はどうなるんだ」と思っている中で、習志野で騒いだ18名分540円だけは解除された、という結末です。日英同盟を結んでいるイギリスからの抗議を受け、「敵産」、敵の資産として大蔵大臣が営業停止をしたのに、収容所長の一陸軍大佐が掛け合うとたった5日で除外されるものなのだろうか…。その割には18名分540円と、金額はわずかなのです。

ここからは、まるで根拠のない、大胆な想像になりますが、この540円は、西郷所長が個人の財布から出たのではなかろうか。そしてこのようなことが度々あって、結局それが西郷家の台所を傾けるようになったのではないだろうか…？

そのように想像される理由は、しかしまるでないわけではありません。

徳川幕府の時代、例えば長谷川平蔵という旗本が火付盗賊改方という役職を仰せ付ければ、幕府から役宅とか役料は支給されるものの、これは実費補填には程遠い「お手当」であって、捕り物に要する費用とか配下の給与、食費などは、長谷川家の家産、家の財産から出さなければならない。火付盗賊改方という職務、お役目を全うするためには、自腹を切らなければならないのですね。

諸大名が江戸城の修理を命ぜられる、などという場合ももちろんそういうことであり、財力のある大名の力を削ぐために、盛んに普請が命ぜられたわけです。

こうしたことは、べつに江戸時代に限らない。軍人の軍服や装備というものは、召集令状で集められた兵隊・下士官については官給品が貸与されますが、将校については原則として、一切自弁しなければならない。軍服や軍帽、長靴、軍刀や双眼鏡など、一式揃えれば馬鹿にならない出費を強いられたといえます。

こういった例に照らすと、一国を代表して外国武官接待掛とか俘虜収容所長を勤め上げるのに、多少自分の懐を犠牲にするのは当たり前。すべて国庫から支給されて何の腹も痛まない、などというポストではなかったのではないか、という気がしてならないのです。

外国では「ノーブレス・オブリージュ」と言います。高貴さは義務を強制する、という意味ですが、まだ日本が野蛮国扱いをされていた時代、戦時国際法を嫌でも遵守して見せなければならなかった時代に、一等国入りを目指して収容所長は身を削ってでも、日本を背負って見せなければならなかったのではないか…。

もしこの想像が当たっていたとしたら、後世の者は西郷所長にむしろお礼を言わなければならないのではないだろうか。零落した西郷家やノブ夫人を嘲笑して、「美田は買わず」と茶化しては済まないのではないだろうか。



今回の『西郷どん』でも、話は流刑先の愛加那さんとか菊次郎の方にばかり行ってしまふようなのですが、またその方が話としては面白いのですが、何故か歴史は「不都合な話」として、西郷寅太郎という人をきちんと伝えて来なかったのではないかな。それだけは確実に言えそうです。

習志野のドイツ捕虜研究の余滴といいますか、ふだんお話できないようなエピソードはまだまだいろいろございますが、残念ながら今日は、どうやら時間がまいったようです。最後までご清聴いただきまして、どうもありがとうございました。

(平成30年(2018)7月15日、船橋市中央公民館、千葉フォーラム歴史・文化の会・千葉県日独協会合同講演会)

***著作権について**

このPDFデータを複製し、またはプリントアウトしてご友人等に配布されることについて予め同意します。 講師